

---

# 仮想現実の扉

永久の詩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮想現実の扉

### 【Nコード】

N0643L

### 【作者名】

永久の詩

### 【あらすじ】

神々のゲーム      それは神の娯楽。

そこに集うのは特殊な者たち、神の掌の上で戦うもの。  
拳を握り、剣を取り、銃を掴み、杖を振り、呪文を唱え、能力を奮  
う。

そんな彼らは何を望み、何を思い、戦うのか。

これはそんな物語      さあ、紅い夢へと堕ちていこうか。

注意      この物語には多数のパロディで構成されています。

とあるストーリー、とあるセリフ、とある場面などにおいてよく知

られているものが使われていることがあることを承の上でお読みください。

## プロローグ（前書き）

この物語には多数のパロディで構成されています

とあるストーリー、とあるセリフ、とある場面などにおいてよく知られているものが使われていることがあることをご了承の上でお読みください

## プロローグ

神々は退屈だった。

神には娯楽が存在しない。

ただ仕事 自らの役割をこなすだけ。

それだけが彼らの存在理由であり、他のことはなにも必要とされない。

そのことだけが、自らの評価に繋がった。

神は完璧な存在かもしれない。

しかし、それはただ一点だけ。

本当の意味で神は決して完璧な存在ではないのだ。

嫌だと思っても拒否することなどできない。

神ですら、そうした運命の鎖に縛られている。

役割という仕事に従事する奴隷か。

そんな、役割を何千、何万年とただ繰り返すだけの生活に嫌気がさしていた。

ぶつちやけて言う飽きたのだ。

同じ作業を真の意味で数え切れないほど繰り返すことに。

神々は暇だった。

しかし、彼らの世界 神界には娯楽の類は何も存在しない。

ただ漠然といつもの作業に取り掛かろうとする。

そんな時、ある神は考え付いた。

「そうだ、人間を使おう！ 彼らなら私たちを楽しませてくれる！」

その言葉に神たちは眉を顰めた。

人間たちは確かに自分たちが管理している。

介入もできなくもないだろう。

しかし、神たちの管理は基本的にただの監視だ。

神の影響力は大きいので、基本的に何かが起こらない限り大きなことはできない。

世界、そして他の神の修正力が働くからだ。

せいぜい間接的にちよつとした奇跡　　砂漠に雨を降らせた

りするぐらいだ。

つまり、世界中の人間に影響を与えることはできないのだ。

神たちは溜息をつく。

しかし、言い出した神は止めなかった。

「違う、全人類である必要はない。ほんの十数人で構わない。

その者たちでゲームをさせて競わせるのだ。

私たちはそれを見て楽しむ。きつと面白い！」

なるほど、と神たちは思った。

確かに十数人　　人間たちのほんの一部ならそうすることは

可能だろう。

その程度のことではすぐに飽きるかもしれないが暇つぶしになるだろう。

僅かに反論する神もいた。

「それはその者たちの運命を変えることになる」と。

しかし、多くの神たちの賛成の意思にのみ込まれた。

「さあ、さっそく準備をしよう。神々のゲームを」

そう言った神の表情は美しい笑顔だった。

どこまでも美しく、どこまでも無邪気で、

まるで悪魔のように

ただただ、笑っていた。

神々は娯樂を得た。

もう一度確認しよう、神は完璧な存在ではない。

決して完璧な存在ではないのだ。

自分たちのしようとしてしていることがどういうことなのか。

そのことが分からなくなるほど彼らは暇だった。

結局はそういうことなのである。

私は目を覚ます。

体を起こすことに意味はない。

ここには上下左右は存在しない。

ただこの空間に存在するのは私自身と一本のカギ、

そして 無数の扉。

ただそれだけだ。

溜息をつき、カギを手を取った。

「やれやれ、また始まるのか」

そう呟くと、目の前に広がる扉の一つの前に立つ。

すると、カギが光り輝き、光球に包まれた。

それも一瞬、すぐに光が弾ける。

私はそれには意も介さず、カギを鍵穴に差し込み、ゆっくりと回す。

そして、扉が音もなしにゆっくりと開く。

扉の中から溢れてくる白い光。

私はその中へとまるで散歩をするかのように歩いていく。

私の体全体が光へと消えた後、その扉は先と同じようにゆっくりと閉まった。

そこにはただ扉だけが広がり、

その扉すら幽霊のように消えていった。

最後にはその空間には何一つ残らなかった。

一人はイギリスにいた。

「僕はそこで見つけられるのかな？」

少年は笑顔のままそう呟き、扉の中へと消えた。

一人は南米の熱帯林にいた。

「ハハっ、やつはそこにいるんだなっ！ いいぜ、オレをそこに連れてけや！」

180cmはある男は犬歯をむき出しにして、扉の中へと消えた。

一人はアフリカの砂漠にいた。

「やれやれ、ゲームとやらに興味はありませんがねえ。まあいいでしょう。私も暇ですから」

体をロープで纏い、フードをしたうえでキツネの仮面をかぶった者は扉の中へと消えた。

一人はとある都市のスラム街にいた。

「…軽く死んでしまえばいいのに。……面倒」

ボサボサの髪で顔を隠した者は扉の中へと消えた。

一人はとある豪邸にいた。

「……いいですよ。私は行きます」

少女はバチツと僅かに紫電をもらし、扉の中へと消えた。

残るは2人。

場所はすでに分かっている。

さあ行こう　　日本へ。

フィールドは整った。

プレイヤーもそろそろ。

後は号令のみ。

いよいよ神々のゲームが始まる。

## プロローグ（後書き）

はじめまして、永久の詩です

文章力なしの文章ですが、読んでいただけると幸いです

更新は基本、週一回日曜とさせていただきます

できるだけ守って、頑張っていきます

## 第1章 “ 始まりの扉 ” (前書き)

この物語には多数のパロディで構成されています

とあるストーリー、とあるセリフ、とある場面などにおいてよく知られているものが使われていることがあることをご了承の上でお読みください

## 第1章 “ 始まりの扉 ”

それは確かある晴れた日のことだった。

「では、行ってくる」

一人の男が低く、張りがあり、厳しさを感じさせる声でそう言った。

しかし、その男は怒っているわけではない。

いつもと同じようにそう言った、ただそれだけだ。

そんな男を見上げている少年はただ頷いた。

その顔は明らかに目に涙を溜めて、それでも泣きまいとして失敗しているそれだ。

男はそんな少年を見て、フツと微笑む。

少年はそれを見て驚いた。

いつも厳しい雰囲気が無表情を貫く男が、優しく笑うという表情ができたことに。

男は少年の頭に手を置いた。

そのまましゃがみ込み、少年の視線と同じ位置まで目を持ってくる。

前触れのない男の行動にビクツと驚く少年は男の手の暖かさを感じ、

そしてどうすればいいのかわからず、ただ男の眼を見つめ返した。

その眼は黒と呼べないほど、どこまでも深い闇のようで、

あらゆるものを知っているようで、見ていると吸い込まれるかのようで、

そして

「大丈夫だ。お前には世界をも変える力がある。自分の力を信じる。



だから早くしてください」

「三日間しかないんじゃない、三日間もあるんだ。その間、この子は一人なんだぞ。」

「……………心配ではないのか？」

開き直ったかのようにそう言う女に対して、龍は静かにそう返した  
すると、女の表情にさまざまな感情　喜び・怒り・嫉妬・悲  
しみが

混ざったようなものがはしる。

それも一瞬、すぐに桜が咲くような笑顔に変わった

「　　あら、何を言ってるのかしら。その子は　　」

そこで言葉を切ると、少年の方に目を向ける

そこから感じられるのは、愛しさ、慈しみ、そして

「　　私たちの子なのよ。心配する必要はないわ、絶対に」

そう断言した女はとても美しく、とても輝いて見えた。

龍はそんな彼女を見て、溜息をつく

「まったくどこからそんな自信が出てくるんだ？」

だがその通りだな。俺たちの子ならば、何を心配する必要  
がある？」

そうまるで自分自身に言い聞かせるかのように龍は続けた。

そんな彼を見て、女はまた微笑んだ。

「だいたいこの旅行はその子が『自分一人で大丈夫だから』  
って言うから行くことになったんだから。」

そんなに心配なら、目的早く終わらせて帰ってくるのが一番だと思えますけど?」

「ああそうだな。……よし行くか、御幸<sup>みゆき</sup>」

「ええ、エスコートよろしくお願いしますね」

御幸と呼ばれた女は頷くと日傘と一緒にクルリと回った。

龍は少年の頭から手をどけ、立ち上がる。

その時、少年から「あ」という小さな声が漏れた。

慌てて口を閉じるが、表情が寂しそうになっているからあまり意味がない。

それに聞こえたのだろう、龍は苦笑した。

「やれやれ仕方ない、少し保険をかけておこう」

そう言うと、服の中に入っていたものを取り出す。

それは首飾り　ただ一つの水晶<sup>クリスタル</sup>を紐に通しただけの飾り毛もないもの

しかし、その石は日差しに当たって虹のように様々な色で輝いていた。

少年はそんな美しい輝きを今まで知らずに見入ってしまう。

「受け取れ」

龍はなんでもないかのようにあっさりとそう言って、それを少年へと放った。

少年は突然放られたそれを慌てて掴む。

すると、一瞬だけ輝きが強い閃光となっではしまった。

少年は咄嗟に目を瞑るが、瞼の上からでも感じるほどの光に意味はない。

同時に目を瞑っているはずなのに視界に何かが見えた。

それは            どこかの風景            誰かの姿            何かの戦い

そんなものが一瞬の間にすべて同時に見えたのだ。  
あまりのことに驚いて、再び目を開けた。

しかし、すでにその時には、光は消え、ただ石が輝いているだけだった。

そんな状況の中、龍は平然と少年の様子を見ていた。

「なるほど、やはり俺の子というわけか」

小さな声でそう呟いていたが少年には聞こえなかった。

そして、「どうした？」と何事もなかったかのようにそう続ける。  
少年は慌てて首を横に振った。

「それをやるう、お守り代わりだ」

龍がそう言うのと少年は本当に驚いた表情をした。

当然だろう、その首飾りは龍がどんな時でも絶対に手放そうとしなかったことを

少年は知っていたからだ。

龍はそんな少年を見て、さらに続ける。

「大丈夫だ、できるだけ早く戻ってくる。その間、家を頼むぞ。」

その言葉は敵として響き、少年の記憶にまで刻まれた。

自然と少年も普段の表情に戻り、頷いていた。

それを見ると、龍は少年に背を向け、御幸の元へと歩いて行く。

二人は並ぶと、もう振り返ることもなく、毅然として歩を進めていった。

少年はそんな二人            深い悲しみを宿した瞳をもつ両親をずっと見つめていた。

一日たった、二日たった、三日たった。二人は戻ってこない。少年は用事が終わらなかつたんだろうと考え、納得した。

一週間たった。それでも二人は戻ってこない。

少年はせつかくの旅行なんだから少し延びてもしょうがないと考え、納得した。

一月たった。連絡すらなかつた。

少年は自分の両親の言ったことを思い出し、自分もあの二人の子だと、

あの二人は心配ないと考え、納得した。

半年たった。少年はようやく二人が帰ってこないことが不安になった。

一年たった。ついに少年は確信に至る。

そして、二人は少年の前から姿を消した。

みんないなくなる。

何もかも壊れていく。

それは誰のせいなのか？

近づいたものは消えていく。

関わった者はなくなってしまう。

ならば、どうすればいいのか？

関わらなければ、近寄らなければいい。

全て捨ててしまえばいい。

そうすれば何も失わない。

最初から何も持っていないのだから。

一人で生きていけばいい。

この手が掴めるものなど存在しないのだから。  
少年 　　だった俺は一人、そう思っていた。

## 第1章 “ 始まりの扉 ” (後書き)

長期休暇中に投稿できるか分からないので少し早めに。  
これは前段階なので、次回から本格的に本編になります。  
誤字・脱字等があれば教えていただけると幸いです。  
では、良き休暇を過ごせることを祈って。

## 第1話 “変わらぬ日常”（前書き）

この物語には多数のパロディで構成されています

とあるストーリー、とあるセリフ、とある場面などにおいてよく知られているものが使われていることがあることをご了承の上でお読みください

## 第1話 “変わらぬ日常”

俺は本から目をそらし、外を見た。

春が去り、夏へとさしかかろうとしている今日。

丁度いいぐらいの日光が降り注いでいる。

桜の木も花びらを散らし、緑色に色づこうとしている。

実に過ごしやすい天気をゆっくり味わおうとして

「大神っ！」

その怒鳴り声でそれは叶わなかった。

俺は視線を呼ばれた方向 前方へと移す。

そこには黒板の前に偉そうに立っている男性教師。

「……………はい」

正直、無視しようかと思ったがえらくイラついている様子なのでやめる。

面倒なのでとっとと終わらせることにして、椅子から立ち上がった。

「この数式を解いてみる」

命令口調で俺にそう言って黒板を指し示す。

そこでようやく俺は初めて黒板に目を向けた。

そこには俺が授業放棄をしている間に書かれたのであろういくつかの数式と図。

…なんだ、この程度か。

「…？＝9、Y＝7、Z＝12」

僅かな間をおいて、俺は淀みなく答えた。

「くっ、正解だ」

嫌そうな顔を隠そうともせず、悔しそうに当たり前なことを言う。確かこの教師、授業を聞いていない生徒にわざとあてて、つるしあげることで

有名だったはずだ。

そんな男に俺は言うてやることにする。

「そうそう、先生、さっき教えていた公式、求め方が違います。

あんな理論、説明で理解できるわけがありません。」

「なっ、何を言っ」

「おそらくあれで理解できる生徒なんてほとんどいませんよ。

ただ指導要項を適当に読んでるだけだからそんな授業しかできないんですよ。」

「ふざけるなっ！ 大神っ態度が悪いぞ！」

事実を告げているだけなのにどうしてそんなことを言われなければならぬのか

俺は黒板のほうに歩きだす。

「大神っ！ 教師に逆らうのかっ退学にするぞ！」

キレた中年のオッサンの怒鳴り声を軽くスル・し、黒板に書いてあるものを

すべて消し、即座に新しい図や数式を書いていく。

最初は怒鳴り散らしていた男も俺がチョークをおいた時にはすっかり静かになつて

いた。

俺は机に戻りながら、顔を青くした男に声をかける。

「教える側の教師がこんなことだから態度の悪い生徒が出るんですよ。」

先生こそ、もう一度勉強しなおしたほうがいいじゃないんですか？」

そう言われ、恥ずかしさと怒りで顔を赤くする男。

しかし、結局何も言うことができない。

俺はそれを確認して再び席に座る。

まったく、素直に別のものを読んでいることを注意すればいいものを…

そう思いながら、教科書ではないもの 有名大学の卒業レポ

ートに目を通そうと

する。

そこに聞こえてくるひそひそ声。

「……………何あれ、感じ悪っ……………」

「……………マジ勘弁してくれよ……………」

「……………空気悪くすんなよな……………」

「……………って言うか最初から学校来なければいいのに……………」

俺がそちらのほうに視線をやると同時にその声は止んだ。

……………本を読む気が失せた。

溜息をつきながら、再び外を見ると相変わらず、心地よい光が降り注いできた。

つまるところ、これが俺

おおがみ しゅん  
大神 俊の変わらぬ日常なのだった。

キーンコーンカーンコーン

どの学校でも同じような気の抜けるチャイムの音で目を覚ました。どうやらあのまま寝てしまっていたようだ。気がしない。

周りを見るとすでに何人かのクラスメートたちは帰り支度や部活道具を持って

教室を出て行っていた。

時間を確認してすでに放課後であることを確認する。

すぐに帰り支度を済ませ、カバンを持って外へと向かう。

そのまま何事もなくゆっくりと校門を出ようとして

「ああ〜っ！ コラ俊っ、何一人で帰ろうとしてんのよっ！」

後ろからそんな声が聞こえてきた。

…無視だな。

一瞬の間でそう判断したので足を止めることはない。

「ちょっと待っててよ、すぐに行くから〜！」

再び聞こえてくるそんな言葉。

加えて近づいてくる足音。

それでも俺は無視を続ける。

「待ってって言うてんのが聞こえないのっ!?!？」

声が怒りを帯び、足音のスピードが上がる。  
そしてダンっどひときわ大きい音と同時に後ろから感じる殺気の塊。

なので慌てず騒がず、僅かに横に避けた。

「ちよっ!? いきなり避けるな〜!!」

そんな言葉を吐きながら、飛び蹴りを放った女子が隣を通り過ぎる。

その勢いのまま、目の前にあった学校の外側の石壁に突っ込んでいった。

ピシっ、ゴシヤツ、ガラガラガラー!

最初の音で壁にひびが入り、次の音で粉碎し、最後の音では見事に倒壊した。

……女の子ともども。

…ああ、今日も派手にやったな。

チラリとその光景を見てそう思い、再び歩き出そうと

「だ・か・ら、待てって言ってるでしょ〜!!」

いい加減聞き飽きた言葉がまた聞こえてきた。

しかたなく足を止めて、そちらのほうを見た。

そこにいたのは瓦礫の山から這い出て来る一人の女の子。

澄んだ空のような瞳、深海のように蒼い髪を後ろでまとめている。

一応、クラスメートである卯杖 真由である。

「まったく俊がちっとも待ってくれないから“また”やっちゃった

じゃない。」

服に付いた埃をはたきながらそう言ってくる卯杖。

どうやら自分が壊した壁のことは気にしていない様子。

まあ確かにいつものことだが、その度に誰が修理しているのか…

俺には関係ないからどうでもいいが…

すると、卯杖は近づいてくると、にっこりと笑いながら口を開く。

「ねえ、一緒に帰」

「断る」

予想通りの言葉を遮って、短くそう返す。

しかし、卯杖はその笑みをさらに深めた。

「よし、やっと話してくれたわね！」

……やはり無視して帰ればよかった。

後悔の念が広がり、俺は溜息をついた。

そんな俺の様子を見てか、卯杖は俺の前に出てきて俺の顔を覗き込む。

「もう、俊はもう少し素直になったほうがかわいいのに」

そして、なんともうっとおしいことを言ってきた。

……なるほど、素直か。それもそうだな。

「悪かったな卯杖。俺は少し遠慮していた。」

「でしょでしょ。だからさ、あたしと」

「うっとおしいから一人で帰れ」

“素直に” そう言って、今度こそ帰り始める。

「ちよつ、俊待ちなさいよ〜！」

後ろから卯杖はついてきているが無視。

聞こえない聞こえない聞こえない

帰り道、卯杖はかなり話しかけてくるが、俺は適当に流していた。

「でさあ、そこで友くんが                    っ俊聞いてる？」

「ああそうだな」

「……さっきからそのセリフばっかなんだけど」

「ああそうだな」

「……………ね」

「ああそうだな」

さすがに怒ったのかカバンを振り回して攻撃してきたが軽く避ける。

こんな感じだが、やはりうっとおしいことこの上ない。

それでも話しかけてくる卯杖の意図は分からないが…

どうしたものかと歩いていると大鉄橋が見えてきた。

今やさびれてほとんど使われていない橋。

多くの人は当然のことながら新しくできた方を使っている。

そのため、この橋を通ってくる車や人はほとんどいない。

だが、俺はいつもこちらの古い橋を使っている。

理由は単純に家に近いからなんだが。

そして、いつものように橋にさしかかった。

「わあ、やっぱり綺麗だよね」

卯杖は嬉しそうに海の方を見ていた。

そちらの方に目を向けると、落ちていく夕日によって紅く輝く水面が広がっている。

卯杖はこの光景がお気に入らしく、よくこっちの橋を使っているらしい。

ちなみにこいつの家は新しい橋を使った方が近いはずだ。

：確かに綺麗かもしれないが、そのために遠回りする気持ちが分からない。

「新しい橋からは、この景色は見えないもんね」

新しい方は陸側に建てられたので当たり前だ。

そう言っている卯杖を気にせず、俺は対岸へと向かおうとする。

「なんだあ？ 男が女連れてこっち来るぜ？」

すると、行き先からそんな声が聞こえてきた。

確認しよう、多くの人は新しい方の橋を使っている。

よって、こちらの古い橋を使うものはほとんどいない。

俺のようにこちらを利用した方が早いという合理主義者。

卯杖のように景色を見たいが為に来る暇人または変人。

この橋を使おうなんて考えるのはそのぐらいの人しかいない。

そんなものを除いてこの橋にいる可能性のあるのは…

そちらの方に視線を向けると、複数の男たちが俗に言うヤンキー

座りをしていた。

全員が「今時いるのか？」と思うような柄の悪さ。

髪を金、又は茶に染めて耳にはピアス、加えてタバコを吹かしていた。

「不良を絵に描きなさい」と言われたら十中八九こうなるだろう。そんな見たままの不良らの3人が立ち上がると気持ち悪い笑みを浮かべ、

ゆっくりと近づいてきた。

「おいおい、こんな所に二人だけで来るなんて危なくねえ？」

「そうそう、襲われちゃうよ？」

「て言うかそこの彼女もさあ、そんな男より俺らの方に来ねえ？」

「ギャハハ、おまえそれチヨクすぎ！」

話しかけてくるそいつらに他の奴らの下卑た笑いが混じる。

その声が非常に耳障りで不快指数が急上昇。

いつもなら無視して適当な所でどうとでもする。

しかし、その場合、どうしても時間がかかってしまう。

そして、今日は早く帰りたい気分だ。

しかたなく俺は真面目にそいつらの方をしっかりと見る。

…近づいてきている3人に、いまだ座っている奴、対岸に2人

6人か。

今は全員武器は持っていないが、この手のやつらは何かしら隠していることが多い。

まあ所詮不良ぶってるやつら程度じゃたいしたことはないが…

とりあえず、奥で座っている金髪グラサンの偉そうなのがリーダーだろう。

適当に状況を把握して、おそらくリーダーであろうやつにあたりをつける。

俺はこの軽い面倒事に対して溜め息をついてそいつらに向かって

口を開く。

「一つ言わせてもらおうと、こいつは勝手についてきているだけだ。俺は関係ないからそこを通せ」

「ちよっ！？ 俊それ酷すぎ！」

俺の言葉に後ろからそんな抗議の声が。

振り返ると卯杖がこちらへとずんずんと力強く歩いてきた。

何なんだ面倒くさい…

卯杖は何やらご不満の様子だ。

「ここは『大丈夫、俺が守るよ』とか何とか言っただけをかばう場面でしょ！」

「そんなこと知るか。勝手についてきたんだ。自分の身ぐらい自分で守れ。」

「……だいたい俺の助けなんて必要ないだろう」

「ええー、だって面倒じゃん。あんなの相手にするのって」

「やれやれ、まったく何を言っているんだ？」

二人でそんな言い合いをしていると、

「おい、お前らオレらをからかってんのか？」

ようやく不良側からそんな声が上がった。

「やれやれ、気づくのが遅いバカどもが。」

「そう思いながら不良どもの方に向き直った。」

「よく見るとさっきよりも顔が赤くなり、血管が浮き出ている。」

「もはや俺にとってはおしとくのおしいだけの存在であるやつらにもつ」

一度声をかける。

「聞こえなかったか、もう一度言っただけ。俺は早く帰りたいんだ。どうでも良いお前らの相手をする気はない。とっとと道を通せ」

そう言うと、ブチッと何かが切れた音がした。タバコを噛み切った音が、堪忍袋が切れた音が、或いはその両方か。

いや、堪忍袋が切れる音って何なんだ？

そんな疑問が頭の中に広がる。

「おい、お前ふざけすぎじゃね？」

「向こうにいる二人呼んで来い！」

「なめてんじゃねぞコラア！！」

そんな言葉を吐いて、凄んでくる不良たち。

しかし、そんな彼らはもはや俺の眼には映っていない。

確かに昔からよく言われる表現だが

「男の方はフルボッコな」

「骨の一本、二本ぐらい折って、病院行きだ！」

もはや声さえも聞こえなくなり、思考に没頭する。

いや、でも実際にそんなことがありえるはずが

「ちょっと、あんたたち何言ってるのよ！？」

「大丈夫だって。君は俺たちが優しくエスコートしてあげるから」

「お前も安心しな。女の方は俺らの方が面倒みてやるよ」

最後の言葉だけがピンポイントで耳に入り、我に返る。

「なんだと」

「お、どうしたよ、『彼女だけには手を出すな』ってか」  
「え、俊、本当!?!」

なぜだか嬉しそうな声を上げる卯杖。  
しかし、俺はそれを否定する。

「いいや、さっきから言ってるだろう。俺とそいつは関係ない。  
お前たちが面倒みてくれるなら後は好きにしろ。  
そうしてくれると俺としてはとても助かる」

ピシッ、そう言ったと同時に、空気が凍った。

それを感じて見ると、不良どもが何やら呆れた様子でこちらを見ていた。

そして、背後から凄まじく冷たい空気が流れて来る。

「……………へえ、そう」

長い無言の後、蚊が鳴くような小さな声でそう呟く卯杖。  
少し気になって、後ろを振り向こうとした瞬間

「てりやあああああああああ!?!?!?!?!?!」

そんな叫び声と共にブンツという音が聞こえ、素早く身を  
屈める。

ハンマー投げの要領で投げられたバツクは、俺の上を通り過ぎ、  
近づいて

来ていた不良たちに直撃。

「ぎゃあああああああああ!?!?!?!?!?!」

似たような叫び声をあげ、吹っ飛んでいく男たち。

僅かながら体が宙に浮いていることからその威力の程が分かる。これが一人の女子高生から生まれたというのだから凄い。

そんなことよりも重要なこととして、卯杖の方を確認する。

卯杖は顔を俯かせ、体を震わせていた。

そして、その体が薄くだが蒼く輝いているのに気付く。

「おい、こんなところで何を」

「あはははははは　　とりあえず一発殴らせなさい」

俺の言葉を遮り、俯いたまま小さな声でそう言ってくる卯杖。その言葉の端々に殺気を感じるのは気のせいではないだろう。

「よく分からないが、とりあえず断る。今のお前に殴られたらさすがに死ぬ」

「うん、じゃあ一回殴られてみようか」

おいおい、死ねってことかよ。これは本気で切れる。どうやら今の卯杖には話は通じないらしい。

「クソッ、ふざけんじゃねえぞこのガキ！」

「優しく言ってやってたら、調子に乗りやがって！」

そんな状況を分かっていないバカどもが体を起こして再び騒ぎ出す。

バカが……今の卯杖は本気でヤバいのに。

俺はやつらの軽率な行動に少し憐れみを感じた。

「　　なんか言った？」

「ヒッ！」

卯杖が顔を上げて声のした方向を見る。

そんな卯杖の表情は凄く笑顔なのに怒りの感情だけは伝わるというた

子供が見ていたら泣くのを通り過ぎて無理にでも笑おうとするだらう修羅だった。

あまりの変化に不良たちは悲鳴を上げて後ずさる。

「ククク、随分と活きのいい女じゃねえか」

「「「こ、近藤さん!？」」「」

すると、そんな様子を見ていた座っていた男が立ち上がった。

やはりリーダー格だったらしい男の行動に他の不良どもが驚きの声を上げる。

そして、近藤と呼ばれた男は何やら気取った様子でこちらに近づいてくる。

きつとこの男、自分がカッコいいとか思っているのだろう、たぶん。

……………これがナルシストというやつなのだろうか？

俺がそんなことを考えている間に近藤は前の方に出てきた。

「気に入ったぜ。おい、オレの女になれ。」

なあに金は好きなように使っていいし、不自由にはさせねえぜ」

「「「なっ、何iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!？」」「」

何やら訳のわからないことを言い出した近藤。

加えて、何故か過剰に驚いた声を上げる仲間たち。

「ばかな、いつも『彼女にする女はいねえ』って言ってる近藤さんが!？」



「 お前ら、ここから生きて帰れると思うなよおおお  
！」

ほらきた。

近藤は滂沱の涙を流しながら、叫び声を上げた。

……………マジ泣きだよ。よっぽどショックだったんだろうな。

まあ、見た目は不良でも中身は純情そうなやつだったし。

「 あれ、これもしかして私のせい？ 」

「 もしかしなくてもお前のせいだから安心しろ 」

あまりの様子を見て我に返った卯杖にそう呟く。

結局、面倒事には巻き込まれそうだ。

近づいてくる不良集団を見て、俺は溜息をついた。

## 第1話 “変わらぬ日常”（後書き）

遅くなつてすみません。

ちよつと現実でいろいろ面倒事に襲われて…

自分も意外と波乱万丈な日々だと自覚しました。

後半はちよつと失敗ですがついつい長くなってしまいました。

次回はこうはいかないと思います。

感想などがあればぜひお願いします。

第2話 “溜息多き日” (前書き)

この物語には多数のパロディで構成されています

とあるストーリー、とあるセリフ、とある場面などにおいてよく知られているものが使われていることがあることをご了承の上でお読みください

## 第2話 “溜息多き日”

近づいてくる不良たちは、いつの間にやら合流した2人を合わせて6人。

何人かは、バットやナイフなど得物を取り出していた。

沈みかけの夕陽に照らされ、赤く輝くそれら。

……今思えば随分と物騒になったな。まあ、不良の定番アイテムか。

そんなことを考えながら、俺も持っていたカバンを置いた。

そんなところに卵杖が少し慌てた様子で近づいてくる。

「ち、ちよつと俊、どうすんのよ!？」

「どうするも何も、とつとと迎え討って帰る」

「いや、なんでやる気!？ そしてあたしはどうすんのよ!？」

「もう一度言うぞ。自分の身ぐらい自分で守れ。それにお前の言葉が引き金だろ」

「元はと言えば俊がケンカ売るのがきつかけでしょ!？」

「俺は思ったままを言ったただけだが？」

「それをケンカ売って言うんでしょ!？」

そんな言いあいもしているが、気を抜くことはない。

逆に、一人の不良が拳を握り、走り出してきた。

「うおおおおおおおおお!!!!!!」

そうだな、とりあえずこいつを不良Aとでもしよう。

俺たちの様子に怒ったのか、怒声を上げて近づいてくる不良A

とりあえず、避けてカウンターでボディブローだな。

俺も合わせるために左腕を前、右腕を後ろで体を横に向けた半身

になる。

そして、体に隠した右手で拳を作り、相手に合わせて踏み込みとうとして

た。  
ポツと、いきなり俺たちと不良たちの間に炎の壁が生まれ

「なっ　　ぐああああ!!」

一番前で走りこんできた不良Aが炎に突っ込み、その身を焼かれる。

着ていた派手な服に見る見るうちに炎が燃え移っていく。

不良Aは飛び出すように炎から抜け出し、地面を転がる。

あの服、かなり高そうだったが、もう使い物にならないな。

必死で地面を転がり、火を消そうとするAを見てそんなことを考える。

……俺？踏み出す前だから止まりましたよ。

「熱っ、なんだあ!？」

「おい、気をつける!　そいつ、バイロキネシスト“発火能力者”だ!!」

他の不良どもの慌てた声が炎の壁の向こう側から聞こえてきた。

……残念だがそれは間違いだ。

俺にはすでにどうしてこんなことが起きているのかが分かっている。

一応の慈悲として、そのことを向こう側に伝えようとして

「てめえら、まあだ懲りてなかったみてえだな」

向こう側から聞こえてきた声に遮られる。  
溜息をついた。予想通りの聞き覚えのある声に対して。

「…あれ、ねえこの声って……」

卯杖も同様に気付いたようだが、それは最早どうでもいいだろう。  
今の問題は向こう側に隔離されたのだから不良たちの方だ。

「しまった、向こう側から気やがった！」

「ちっ、あの腕章、ガーディアンズ“生徒執行連盟”か!?”

「っておい、やべえよ!あいつは　　!!!」

「ゲッ!　おい、今すぐ逃げるぞ!!」

面白くなるほど慌てている声が乱れ飛ぶ。  
そこに降りかかる一人の男の言葉。

「まあとりあえず、恐喝、暴行、その他諸々の現行犯として、軽く燃えてな!」

その言葉が響くと同時に始まるドンツという爆発音と不良どもの怒声と悲鳴。

音が響くと炎の向こう側から僅かに爆風が吹いて来て、炎の壁を揺らす。

「おらおらどうした！？ 少しは根性見せてみるよ！！」

「く、なめんなああああ！！」

「そうそう、そうやって特攻して とつとと燃え散りな！」

「ぐわあああ！！」

そんな会話が聞こえてくるたびに響き渡る悲鳴、数を減らす怒声。爆発音の度に一瞬だけひと際強く辺りを照らす閃光。そして、2、3分もしないうちにそれは収まった。

「まったく、二度とこんなことしねえようにしたつもりだったんだが…」

よし、今度は前の2倍、地獄の更生プログラム

通称『人間の限界に挑戦！・Vol.1・2』でも組んでやる

う

残ったのは返ってきた静けさの中に混じる不良たちとは違う男の声。

なにやら物騒な単語を口に出しているのが、炎の向こう側から聞こえてくる。

俺はカバンを拾い、踵を返して、ここを離れるためにもと来た道に戻ろうとする。

俺の心は言っている。

『なんでわざわざ戻らなきゃいけないんだ？』と。

分かっている。早く帰りたいのだが明らかに遠回りになる。

そのためにわざわざバカどもの相手をしようとしていたのだから当然だ。

苦勞を考えたら、来た道を戻るなんて馬鹿げている。

しかし、俺の頭は冷静に言っていた。

『このままここにいるとますます面倒になる』と。

俺は即座に心の声を切り捨て、行動を開始する。

「…あれ、俊？ どこ行くのよ？」

卯杖のそんな言葉も無視して、歩を進めようとして

「おい、俊！ てめえ何勝手にいなくなろうとしてるんだよ

」！

後ろからそんな声がかかり、俺は足を踏み出す前で止まり、溜息をつく。

ああ、なんでこう次から次へと……

俺は降りかかる面倒事を嘆きながら、仕方なく振り返る。

先ほどまであった炎の壁はすでに消えていた。

代わりにそこに立っていたのは一人の男。  
まもなく完全に沈むであろう夕陽に照らされ、全身が赤く染まっ  
て見える。

身長は俺より5cmほど高いだろうし、体つきもよい。

明らかにただ漠然と体を動かしているだけじゃないことが分かる。  
服装は一応俺と同じ制服だが、その腕には凝ったデザインの腕章  
をつけている。

そして、目を引くのが男の髪。

夕陽に照らされ、なお負けず、さらに輝きを増している炎のよう  
な赤。

「ガ、  
“生徒執行連盟”<sup>ガーディアンズ</sup>の芹川<sup>せりかわ</sup>海人<sup>かいと</sup>」

茫然とした様子で、自身についていた火を消した不良Aがその男  
の名を呼ぶ。

海人と呼ばれた青年は、そう言った不良Aの方を向く。

「なんだ？ まだ残ってたのか？ 抵抗されんの迷惑だからサクッ  
と気絶してろよ」

「な、なんでここに？ それに仲間……！？」

「あ？ ちょっと歩いてたらお前らの姿見てよ、  
久しぶりに会ったからどうしてんのか確認しておこうと“監視”  
していたら、

前とほとんど変わってねえじゃねえか。

多少のことはともかく、他人にケンカ吹っ掛けるようじゃな。

という訳で、一応“生徒執行連盟”<sup>ガーディアンズ</sup>としてそれを止めたわけよ。

あと他の連中ならオレの後ろにいるだろ」

そこでようやく俺はさっきまで炎で遮られていた向こう側に目を向けた。

さっきまで粹がっていた不良合計5人は、全員気絶しており、表情は恐怖に塗り固められた状態で固定されたまま、軽度の火傷の跡を残し、

まるでゴミ屑かのようになって転がっていた。

服も焦げていたりして、未だに所々でブスブスツと燻っている煙が発生している。

加えて彼らの周りを見ると僅かながら消え切っていない炎があった。

さらに小さいがコンクリートが抉れて穴になっている所さえある。

「……………いやいや、やりすぎでしょ」

卯杖が小さい声でそう呟くのが聞こえた。

しかし、どうやら芹川には聞こえなかったようだ。

「て、てめえ！　いくら何でもやりすぎだろ！？　鬼かお前は！？」

「ああ？　見た目はわりいかもしれねえが手加減したから大した事ねえよ。」

それにこの後はもっと楽しい地獄が待ってんだからな」

仲間の凄惨たる状況を確認したのだから、卯杖と同じ内容を口にする不良A。

対して、何でもないかのように答えを返す芹川。

しかも、付け加えるかのように言った言葉では実に楽しそうな表情だった。

「ふ、ふざけんじゃねえ！！ これ以上好き勝手されてたまるかあ  
ああ！！！」

そんな芹川の様子に激昂した不良Aは殴りかかる。  
それを見て嬉しそうに顔を綻ばせる芹川。

「おお、いいねいいね！ そう言った根性は嫌いじゃねえ」

そんなことを言いながら、芹川は拳を握って思いつきり振りかぶる。

「ま、この後の指導のときに見せてくれや！」

そして、殴りかかってきた相手に思いつきり叩き込んだ。

ゴンツという音とともに一撃で意識を刈り取られ、吹っ飛ぶA  
その勢いのまま数m転がり続け、止まると立ち上がる気配はなかった。

「はい、これで制圧終了ー、あとは他の奴らに任せりゃいいだろ」

あっさりと言うと、芹川はこちらの方に向き直った。

「よ、怪我ないか真由？ ………………それからついでに俊？」

「ん、あたしたちは大丈夫。  
だけど、どっちかって言うところ転がっている人たちの方が不安なんだけど？」

「ああ、手加減したから死んではねえだろ多分」

…………… あっさり多分とか言うなよ。

一応確認しとくが、こいつ

芹川海人は俺と同じ学生服を着

ている通り、

俺と卯杖の同級生であり、同じ学校に通っている。

幸い、クラスメートではないが、かなりの頻度で遭遇する。

俺は静かに溜息をついた。

「ついでにとは御挨拶だな。

こっちは守るべき一学生なんだから怪我の確認は当たり前だ。

あと、今後はこんなことがないようにするのが「生徒執行連盟」ガーディアンズの仕事だろ」

「守るべき相手がどうかによるわな。後半は大丈夫だ。今度は少々きつく絞つとく」

こいつは帰ってからさらにいたぶるつもりのようなのだ。

芹川はそう言って、手の方では何やら小型の機械 専用の通信機を取り出す。

「あー、こちら芹川海人。地点F-6にてバカどもを捕獲。車の手配よろしく」

『了解、だが今、車が他の所にでているから20分ぐらいかかる』

「おー、むしろ好都合だ。オレの方はもう少しかかる」

『……?まあいい、待機しておけ。そのまま拾う』

「へいへい、じゃ、通信終了ーつと」

そのような会話をして、通信機をしまった。

“生徒執行連盟”ガーディアンズ

それは学生によって結成された組織だ。

増えていく学生の犯罪・不正を取り締まるために作られており、学校だけでなく、街中ならその権力を使うことが可能だ。

まあ、単純に言えば、学校の風紀委員がさらに大きくなったもの

だと考えればいい。

そして、芹川はその一員であり、かなりの成果を上げていることで知られている。

さて、説明口調になったが、そんなことは関係ないし、どうでもいい。

「なら、俺はもうここにいる必要はないだろ。さっさと帰らせてもらおう」

そう言っつて、俺はようやく橋の向こう側へと進もうと芹川の横を抜けて行くこうとする

が、

「待てや、まだてめえへの用事が終わってねえ」

芹川は腕を横に伸ばし、俺の進路を遮った。

やれやれ、たかが一つの橋を渡るまでに随分と時間のかかること。俺は嫌気がさす気分で目のギラつかせた芹川を見た。

「用事？ それが何か知らないが、早く帰りたいから今度にしろ」  
「そう言っつなよ。すぐに終わることだしな」

嘘だな。すぐに終わる内容ではない。

実のところ、俺は芹川の用事が何か想像はついている。

……まあ出会えば大抵そうなるからな。

「だが断る。いろいろと面倒だ」

「まあそう遠慮すんなよ。ちょっと活動に協力してくれたお礼だしな」

「えっ、なにかお礼あるの!？」

「おお、卯杖には後でお菓子の詰め合わせでも贈っとくわ  
「やった!」

おい、卯杖。何どさくさに紛れてお礼要求してるんだ…

そもそもお前もこれから起こるであろう俺へのお礼は予想付いて  
るだろうが!

「余計なことをしなくていい。お礼なら早く帰らせる」

「そう言うな。俊には特別用で今この場でできる。もったいねえだ  
ろ」

言葉を重ねるたびに、芹川の一言一言に気合が高まってきている  
のを感じる。

そして、芹川の周りから陽炎が上がり始めているのは気のせいじ  
やないだろう。

なんでこう、俺の周りには自分の力を乱用するやつが多いのだろ  
うか。

少しは穩便に事を収めようとしろよ。

いや、俺は違つぞ。さっきは例外でいつもは適当に何とかするし。

「……もう予想できているが一応聞いておこう。何だ?」

俺がウンザリと訊ねてやると芹川は実に楽しそうに叫んだ。

「今日こそ決着つけようぜ、俊!!!」

その瞬間、ポツという音と共に火の粉を含んだ熱風が芹川を中心に吹き抜ける。

それと同時に辺りの気温が急上昇。

あいかかわらず、暑苦しい……………

俺は芹川の超能力サイキックの発現を見てそう思った。

パイロキネシス  
“発火能力”

それが芹川海人の能力であり、彼が超能力者であることの証だ。

今や数十年は発展することはないとまで言われていた科学が示した

新たな人間の可能性が“超能力”サイキックだった。

とある学習を受けるとその人間に合った能力が目覚める。

能力は千差万別で、一般的なものから個人的なものでさまざまである。

そのあたりは人の遺伝子情報が関係していると聞いたことがあるが……………

まあ今回は割愛しよう。

さて、そんな超能力サイキックの中で芹川パイロキネシスの発火能力はかなりポピュラーな部類だ。

文字通り自ら火を生み出せるライターいらずの便利かつかなり攻撃的能力。

一般的には自分の手のひらサイズの炎を発生させることができる程度。

一応、超能力は人間の能力の一部と同じで、使うほど、鍛えるほど強くなる。

最近では、超能力専門の授業を取り入れた学校も増えてきている。俺たちの学校もそのひとつであり、先進的に授業制度が整えられている。

そして、芹川はそんな中でもトップレベルパイロキネシストの発火能力者であることまで有名だ。

学校の授業に加え、生徒執行連盟ガーディアンズの訓練と実践。

それらで鍛えられ、本人の才能もあって、1、2位を争う使い手に成長した。

先ほどの炎の壁はその一端であり、不良たちを倒すなどお手のもの。

本気を出せば、人ぐらいなら簡単に焼き殺せるらしい。

この力を使い、芹川は生徒執行連盟ガーディアンズで活躍している。

戦闘になれば、真っ先に狩り出されるのが芹川であり、さらに経験験を積んでいる。

今や、その実力が全国で見ても高ランクなのは言うまでもない。

そんな芹川 of 能力を見て、俺は驚くこともなく冷静に言葉を返す。

「それは俺へのお礼にならないだろ。」

「だいたい、いつもお前が勝手に殴りかかってくる勝負に決着といわれても」

「ああ、わりい。お前へのお礼って話は嘘だ。単純にオレがお前と

戦戦いたいだけ」

「知ってるよこの戦闘狂バトルマニア。そして、とうとう本音暴露したな」

俺はそこで思考を加速させ、一つ提示する。

「条件だ。俺が勝つたらもう二度と俺に勝負挑んでくるな」

「ああん？ …… まあいいぜ多分、だが勝てたらな？」

「多分言っガ。だいたい、生徒執行連盟なら訓練相手ぐらい幾らでもいるだろう」

「もうあそこにいる奴らは誰も相手になってくれねえんだよ」

『なんでかなあ？』と呟く芹川だがその理由は簡単だ。

そもそもこいつほど強い奴はほとんどいないし、模擬戦だろうと

手加減しない。

そんなやつと訓練として戦おうとする奴など皆無だからだ。だからといって一般市民と戦おうとするのは根本として間違っているが。

さて、いつもなら結局強制バトルにはなるが、一応適当にあしらうところだ。

だが今回、そもそも不良たちとも軽く戦い合うつもりだった。確認のため言っておくが、その理由は早く帰るためだったはずだ。しかし、たび重なる面倒事、どんどん潰れていく時間。正直に言おう、今俺は少し苛立っている。

この状況に、降りかかってくる面倒事に、そしてなにより全てを消し去ってしまえと考えが浮かぶ自分に。

「……20分と言ってたな。と言うことは後10分ほどという訳だ。いいだろう、それまでに終わらせてやる」

俺はそう言って、さっきよりも遠くの橋の柱の影にカバンを下ろす。

流れ弾で燃やされたら、流石にまずい。

そして、再び芹川と向き合う。

芹川は少し驚いた様子でこちらを見ていた。

「おっ、どうしたよ？ えらくヤル気じゃねえか？」

「どうでもいい、さっさと終わらせてそこを通らせてもらおう」

「言ってくれるじゃねえか。で、それは俺の勝利でか？」

「お前の想像にまかせよう」

そう言うと俺はゆっくりと芹川の方  
橋の向こう側へと歩  
き始める。

その歩みはどこまでも平坦でいつもと変わらない。  
そんな俺の様子を見て、芹川は軽く睨みつける。

「ほお、オレに対してそんな態度がとれるとはな。  
いいぜ、今日は本気で相手してやるよ!!」

芹川が掌をこちらに向けると、そこから小さな火の玉が生まれた。  
それは見る見るうちに巨大化し、大きな火球へと変貌する。

「いくぜ、おらあああああああ!!!!」

芹川は獰猛な笑みを浮かべ、叫び声と共に火球をこちらへと放つ  
た!

そのスピードもかなりのもので、明らかに手加減などされていない。  
い。

当たればほぼ間違いなく死が確定する、そんな一撃。

俺に死を与えようと迫ってくる火球に視界が埋め尽くされる。

紅く染まった世界の中で、俺はただそれを眺め

鋭さをもった瞳を、僅かに笑いを浮かべた口元で迎える。

「……………あれ、あたし、はぶられてる?」

そんな卯杖の呟きを、爆発音が消し去った。

## 第2話 “溜息多き日”（後書き）

……あれ、おかしいな、なんでここまでしかいかないんだ？

本当だったら、この文字数でもっと先まで行くはずだったのに。

付け加え付け加えで気付いたらこんな感じに……

グダグダ感満載ですみません。

さて、来週の更新はおそらくできないと思います。

序盤で早々ごめんなさい。別の作品を書かなければいけないので。

それはひよっとしたら載せれるかもしれませんが今は未定です。

できるならまた来週、無理なら再来週にお会いしましょう。

### 第3話 “それぞれの心情”（前書き）

この物語には多数のパロディで構成されています  
とあるストーリー、とあるセリフ、とある場面などにおいてよく知られているものが使われていることがあることをご了承ください  
ご了承ください

### 第3話 “それぞれの心情”

ふと思えば日が落ちて少々経ったのか、かなり暗くなっていた。

「……………やれやれ、結局時間をくったか」

俺はそう言っつて溜息をつくつと、目の前に視線を向ける。

仰向けに倒れ、荒い息を繰り返している芹川へと

「ハアハア、くそ……………があ……………」

倒れたままそう吐き捨てるのを上から見下ろす。

特に外傷があるわけではない。超能力の酷使による疲労だろう。

まあ、俺の方からは一切攻撃を加えていないから当然なのだが……………

かく言う俺にもすり傷や火傷どころか服に焦げ目一つついていない。

それとは打つて変わつて、海人の前方　俺の周りでは数多く火が上がっている。

先ほどの不良との戦いとは比べ物にならないほど、地は抉れ、穴を開けていた。

特に俺と芹川の間がひどく、俺の後ろに進むたびにその数は少なくなつていた。

しかし、火の勢いはもうそんなに強くない。

芹川のが力が限界を迎えているため、維持しきれていないのだ。

あと数分もしたら完全に鎮火して、照明のないこの橋に暗闇が覆うだろう。

それだけのことを確認して、俺は自分のカバンを取りに戻ろうとして

「あーあ、今日はまた一段と激しかったね」

後ろから卯杖がヒョコツと顔を出してきた。

いつの間にか近づいて来ていた卯杖は、楽しそうな声音でそう言うってくる。

今までただ黙って俺の後方にいたはずだが、彼女にもこの戦いの影響は一切ない。

芹川は多少流れ弾を気にしていたようだが、それでも逸れた火球は発生していた。

俺は芹川の心情を利用し、攻撃しづらい卯杖と芹川の対角線上にいたわけだが。

当然、向かってきた火球を避けると卯杖へと飛んでいくが、俺は全く気にしない。

そもそも俺が卯杖を助けるなどということをするはずがないにも関わらず、だ。

よく見ると先刻と同じように蒼い光が卯杖の体に纏っていることに気づいた。

大方、自分の能力を使用して防いだんだろう。

卯杖を観察しながらそう判断する俺に卯杖はジト目を向けた。

「ところで、俊、わざと私の前に立ってたでしょ」

「さて、何のことだ？ 芹川の攻撃を避けるのに精一杯でよく分からないな」

「嘘だ!!」

「少しは自重しろ。だいたい何を根拠に……」

「じゃあどうして海人の炎があたしの方に飛んでくるのかな、かな？」

「だから自重しろよ。そしてカバンを錠のように持って振りかぶるのを止める。」

「だいたい芹川がコントロールを誤った可能性もあるだろう。」

それに芹川の力による攻撃だ。文句なら芹川に言え」

「海人なら絶対に力の制御誤ったりしないわよ！」

「その信頼を少しは俺の方にも欲しいところだな」

まあ確かに、芹川が力の制御に失敗するなど余程のことが起きない限りない。

強力な能力を制御できるからこそそのトップレベルだ。

とはいえどうしても流れ弾をゼロにすることはできない。

確かに、俺もいくらかの原因ではある。

しかし、芹川の原因の比重のほうが大きいはずだ。

はつきり言つて俺だけに怒りを向けていることに納得がいかない。

俺はそんなことを考えながら溜息をついた。

すると、なにやら先ほどまで怒っていた卯杖が急に慌て始める。

「えっ！？ いや、別に俊を信用していないわけじゃなくて……っ」

手をブンブンと大きく振りながら、よく分からないことを口走る卯杖。

最後の方は小声でゴニョゴニョ言っていたのでよく聞き取れなかった。

……まあどうでもいい。今はカバンが先決か。

とりあえずそう判断して、そんな状態の卯杖は無視してカバンを取りに行く。

地面はかなり多くの穴が空いていて、非常に歩きづらい。

……それにしてもこの橋、いったい誰が修理するんだ？

最早ほとんど誰も使わないとはいえ、公共物をここまで破壊していいのだろうか？

被害を見てそんなことを考え、できるだけ被害の少ない端っこの方を歩いて行く。

一番被害の大きい橋の中心部を超えると、徐々に歩きやすくなる。そして、とあるところからプツリと戦いによる被害が途切れていた。

即ち、先ほどまで卯杖がいたはずであろう場所である。

橋を二等分するかのようきれいに穴だらけかそうでないかで分かれていた。

そして、そのラインの付近に小さな小壇が一つ砕けた跡がある。俺はそれを一瞥すると、そのままカバンの方へと向かった。

それは、置いたときとまったく変わらない状態でそこにあった。一応柱の影に置いていたがその必要もなかったかもしれない。とにかくそれを拾ってしつかりと持つと再び戻り始めた。

その途中で最初に殴りかかってきた不良が倒れているのを見る。芹川の後ろに倒れていた他の連中とは違い、こいつは戦闘圏内だった。

芹川は卯杖のことはともかくこちらはかなり気にしていなかった。そのことは明らかにそいつの周辺が荒れているのはつきりしている。

しかし、それでもその男は無傷で先ほどと変わらず気絶している。正確にいえば、その男の半径1mほどの円形の範囲を含めて。

「……やれやれ、まめなことだ」

俺はそう呟いて、この状況を作り出したお人よしの方を見た。

自分だけでなく、わざわざ襲いかかってきた相手まで守った女の子。

彼女はどうかやら芹川の容体を確認しているようだった。

まったく、自分の力を好き勝手発揮しすぎなんだよ……

俺は小さく一つ溜息をついて、もと来たルートを戻っていった。

「ねえ、海人。いい加減諦めたら？ もうずっと負け続けじゃん」

戻ってきた俺が最初に聞いたのは卯杖のそんな言葉だった。

卯杖は芹川の傍に座って、諭すような口調で語りかけていた。

対して芹川は未だ倒れたままとはいえ、すでに荒くなった呼吸を整えている。

しかし、疲労がひどいのか起き上がることなく、ただ闘志籠った目線をしていた。

「オレもまだ一発ももらってねえつうの！ 負けたわけじゃねえ！  
！」

芹川はその言葉に吼えるかのように返事を返す。

確かにその通り、事実ではあった。

今回を含め、このいざござは何回があったが、彼は一度も俺に攻撃をさせてない。

これは俺が攻撃しようとしていなかったわけではない状態での結果だ。

純粹に芹川が炎をうまく利用して、俺を近づけさせなかったことが理由だった。

近づけば近づくほど過激になる芹川の攻撃に俺は引かざるをえなかった。

なので、全ての勝負は芹川の体力が尽きるか俺が適当にまくかして決着していた。

今回は俺が逃げずに少しばかり積極的に近づいたので芹川の限界がすぐに来たが…

まあ芹川もいつも以上に攻撃を激しくしていたからそれが原因でもある。

とりあえず、これだけ叫べる元気があるなら大丈夫だろうと判断した。

俺は今日何回目か最早分からなくなった溜息をつく。

「俺はもう帰るぞ。いい加減迷惑だ。ここは通らせてもらおう」

「ちょっと俊、待ってよ！」

そう言って、芹川の横を通り過ぎ、そのまま向こう側へと歩いていこうとする。

卯杖が何やら引きとめようと声をかけて来るがまるっと無視。

目の前に転がっている不良たちは未だに起きる気配はないようだ。少しばかり警戒して、そのことを確認してから通り過ぎようとした所で

「待てよ、まだ俺は負けてねえって言ってるだろうが！」

「海人っ、まだ寝てないとダメだったら！！」

そのような声が背後から聞こえてくる。

まったくあのバカは……

そう思いながら、後ろがどのような状態であるのか確信した。

顔だけ振り返ると、上半身だけ起こした芹川が俺に掌を向けていた。

そこには最初とは比べ物にならないほど小さいが、火球が発生している。

それを卯杖が必死に止めようとしていた。

そんな予想通りの状況をバカらしく思いながら眺め、俺は芹川に言うてやる。

「やれやれ、もうまともに身体も動かせなくせによく言う。お前が能力を使って俺を倒しきれなかった時点でお前の負けだ。もうじきお前のところの仲間の応援が来るんだろう？ そいつらにでも助けてもらうんだな」

俺は再び顔を橋の向こう側に向けるとそちらへと足を運びなおす。小さいながらも火球という攻撃方法をもつ芹川も関係ない。芹川に背中を堂々と見せながら、歩を進めていく。

「て、てめえ……くそつ、いいか次はぜってえ一発いれてやるからな！！」

芹川のそんな負け犬的発言にも振り返ることはもはやない。

……まあ正直、もう面倒なので勘弁してほしいが。

そんなことを思いながら、俺は不良たちの横側を通り過ぎていく。

「ちょ、俊！？ ご、ごめん海人、あたし行くから！ 俊待ちなさーい！！」

卯杖が慌てた様子で芹川のそばを離れ、俺を追いかけてきた。

こいつも芹川のところにいればいいものを……

そう思うが口に出すと間違いなく言い争いになるだろう。

これ以上時間を潰されたくないの、しかたなく黙認。

そして、俺はようやく鉄橋をあとにできたのだった。

俊と真由の姿が見えなくなつて、すぐにオレは再び倒れた。同時に半ば無理やり発生させていた炎がパツと消える。

火の粉が鮮やかかつ儂げに散つていくのが見えた。

自分の調子を確認すると少しでも身体を動かすと気だるく感じ、思わず舌打ちする。

「やっぱ、もう動けねえな……」

オレは大の字にして身体を休めながら、そう呟く。

実際、最後に上半身を起こせたのは完全に気力によるものだった。どんなトップレベルの超能力者サイキッカーでも強い力を使い続けるのには限度がある。

そして当然、それに見合つた疲労もする。

超能力といつても人間の能力の一つであることには変わりない。その辺はスポーツと同じだ。

普通ならある程度休憩を取つたり、加減をしたりすることでそれを防ぐ。

しかし今回、限界を超えて能力を使い続け、今や力がまったく入らないほどだ。

そこまですたのに、俊にはオレの力は全く通用しなかった。

「たくつ、オレも相当強いはずなんだがよ……」

思わず悪態を漏らしてしまう。

生徒執行連盟ガーディアンズに入って約一年、厳しい訓練をずっと続けてきた。あまりの厳しさに同僚が何人も辞めていく中、オレは一日も欠かさず続けた。

それによって能力は初めのころより遥かに強力になった。体力もついたし、今回は無視したが自分の能力の使い方も分かっている。

実戦による経験も積んだし、手柄も立てていることがそれを証明している。

そんなオレにとつて、この能力、この力は自分の努力の証だ。

自分の強さの、生徒執行連盟ガーディアンズとして働けることの誇りでもある。

しかし、あいつ　　俊はそんなオレを軽くあしらう。

一年間正式な訓練をしてきたオレをただの一般高校生のはずのやつが、だ。

だからこそ、オレはあいつを認められない。

それは自分の努力を、力を、強さを否定してしまうことになるからだ。

才能と言っくだららない（とオレは思っている）ものに負けたくないから。

そんなことを考えていると、ふと昔のことを思い出してしまった。

そもそもあいつは出会った時から大概だった。

細かい内容は省き、簡潔に説明すると、その日オレに一本の通話があった。

一人の学生が複数の男たちに裏路地に連れて行かれたと通報があったらしい。

そして、偶然近くにいたオレにその現場に行けというものだった。

その頃、ようやく能力が実戦でも使えるようになったオレはすぐに向かった。

しかし、その現場につくとすでに全てが終わっていた。  
狭い裏路地で複数の不良たちが折り重なって地に倒れている。

その中でオレと同じ学校の制服を着た一人の男子高校生が立っていた。

オレは驚いた。

そいつらがそこそこ強い超能力者サイキッカーの集まりとして有名なやつらだったこと。

そしてそんなやつらをオレと同じ学校のやつが一人で片づけたことに。

「やれやれ、やっと来たか」

その学生は溜息をついた後、こちらを向いてそう呟いた。

その顔を見た途端、オレはそいつが誰だか分かった。

大神 俊                      クラスは違うが同級生であり、頭の良さで有名なやつ。

学校始まって以来の天才であり、その上で問題児ともされている男。

そんな男がその状況を生み出したことにオレは茫然となり、言葉を失う。

「まったく、なんで被害者が解決しないといけないんだ？

普通お前ら、生徒執行連盟ガーディアンズがその前に何とかする問題だろ。

サボってないでしっかり働けよ、芹川海人」

しかし、その言葉を聞いた瞬間、我に返ると同時に怒りが湧きあがる。

『どうして名前を知っているのか』という疑問すら思い浮かばなかった。

「ああん、今なんつったよ？」

「聞こえなかったのか？ 耳が悪いわけでもあるまいし」

「……謝るなら今のうちだぜ？」

「残念だが謝る理由が見つからないんでな」

オレはその言葉を聞いて、無言でゆつくりと通信機を取り出した。電源を入れ、すぐに連絡を入れてきた本部の方に繋ぐ。

「あー、こちら芹川、先ほど現場に着きました」

『こちら本部、状況を説明しろ』

「不良たちは鎮圧。輸送車を一台送ってきてください。」

……加えて、被害者が少々怪我をしたので救急車も一台お願いします  
「ます」

「ちよつと待て、俺は怪我なんて」

『なに、状態は？』

「奴らの中に発火能力者がいたらしく、火傷が多数見られます」

「おいコラ、ちよつといろいろとツッコませろ」

『分かった。すぐにそちらに手配する』

「よろしく願います。通信終わり」

「ちよつとは話を聞け」

オレはそう言っただけで通信機の電源を切ると、仕舞い直す。

そして何とも言えない苦い顔をする俊に爽やかに笑顔を向けてやった。

「これでよし。よかったな、これで怪我をしても大丈夫だぜ」

「怪我をする予定はないから余計なお世話なんだが」

「そんなことねえだろう？ これからたっぷり火傷するんだからな」

「それはこれからの犯行予告と取っていいのか？」

飄々とした様子でそう嘯く俊の姿を見て、怒りの感情が能力として発現する。

怒りは炎として現れ、それは火球という形に変わり、弾丸として撃ち抜く。

「その生意気な口、二度と聞けないようにしてやらあああ……！」

そこからオレは容赦なしで俊に火球を撃ち放った。

とまあこんな感じの出会いだった。

思い返してみても随分ひどいものだと思う

……謝る気もやり直したいと思う気もサラサラないが。

あその後、結局裏路地を好き勝手に逃げ始めた俊に撒かれてしまった。

傍から見ると一人の犯罪青年を生徒執行連盟が追っているように見えただろう。

実際は被害者を守る側の人間が攻撃している図だったが。

それからオレは勝手にやつをライバルだと考えるようにした。

あいつを一回でも負かさないう限り、オレは前に進めないと思ったからだ。

そして今現在に至るまで何回も勝負を吹っ掛けていった。

回数は数えたわけではないのはつきりとしなが、数十回は超えている。

しかし、その全てが俊が無傷であしらうという形だった。手を抜いているわけではない。

確かにあまりに重症になるような攻撃は自重しているが、本気ではある。

加えて、こちらが全力で殺すつもりで戦ったとしても効かないの

ではないか？

そう思わせてしまうようなものが俊にはあった。

結局のところ、今のままでは勝てる気がしないのだ。

「おい海人お、大丈夫かあ？」

そんな思考に耽っていると遠くの方からオレを呼ぶ声が聞こえてきた。

それが生徒執行連盟の仲間のものであることがすぐに分かり、安心する。

その途端、急に眠気が襲ってきて、オレはそのまま目を閉じた。ゆっくりと意識が薄れていく中、途切れる寸前にある疑問が浮かぶ。

『はたして大神俊の力とは一体何なのか？』

芹川 海人 Side Out

いつもと同じ帰り道だが、少し時間が遅くなっただけで雰囲気は全然違う。

いつもはついていない照明が心細げながら辺りを照らしている。

しかし、それによって闇の部分はさらに暗さが増しているように感じる。

そんな中を俺と卯杖は無言で歩いて行く。

卯杖も前とは打って変わって、何も話しかけてこずに俺の後ろを歩いてきた。

そのまましばらく歩き続けると、二手に分かれる分かれ道が見えてきた。

ここで俺は右、卯杖は左に別れることになる。  
そもそも卯杖は最短コースは別の道なのだが、なぜか遠回りして  
いる。

しかし、この道を逃すともと来た道を戻らないと絶対に帰れない。  
実質、これがラストリミット、最後の道だ。

「……じゃあ、あたしはこっちだから」

卯杖はそう言って、軽く走って俺の前へと出てくる。

そのまま帰ればいいのに、何故か俺に背を向けたまま立ち止った。  
無言のまま立ち止る卯杖を特に気にせず、俺は右の道に進もうと  
して

「ねえ俊、どうしてそんなに人を避けるのよ？」

突然の卯杖の言葉に足が止まり、そちらに顔を向けた。

卯杖はいつの間にかこちらを下から覗き込むような形で振り向い  
ていた。

そして、軽い口調はまるで変わらないまま、表情だけ真剣なもの  
にしている。

「俊っていつも一人で生きていこうとしているじゃん。

でもさあ、人を人として見ないのはどうかと思うんだけど？」

「黙れ」

続けて出る卯杖の言葉に対して、思わずただ一言だけの言葉が口  
から出る。

静かに、しかし絶対の否定。

だが、卯杖は顔色、口調一つ変えないまま言葉を続ける。

「そういえば、俊の力も気になるところなんだよねえ。  
あたしもちよつといろいろ調べてみたけどさっぱり分からないし。  
おそらく海人もそうなんじゃないのかなあ？」  
「黙れと言っている」

俺の中で激しい激情が暴れ始める。

全テヲ、存在スル全テヲ、才前ガ望マナイ全テヲ  
そんな言葉が俺の頭の中に響き始める。  
やめる、俺はもうこれ以上誰も

っ！

「ひよつとして関係があるのって」  
「黙れっ！..!」

卯杖の言葉を遮り、俺の怒鳴り声が夜の空へと響き渡った。  
はたしてどちらにそう言ったのか、それとも両方なのか、俺にも  
分からない。

ただ激情のまま叫んだ言葉は自分でも信じられないほど激しいも  
のだった。

おそらく卯杖を睨みつけているだろうが、彼女の顔を見つめた。  
卯杖はそれに対してすら、まったく表情を変えることなくこちら  
を見ている。

そして、再び戻ってくる沈黙という名の静けさ。  
ただ自分の乱れた呼吸音だけがやけに荒々しく聞こえた。  
しばらくそんな状況が続いた後、俺は卯杖から顔を逸らした。

「……………」  
「じめん」

同時に顔を俯けた卯杖がそう呟くのが聞こえてきた。

その言葉は先ほどまでと違い、小さく、そして悲しみの感情が宿  
っている。

そんな卯杖のほうに俺は顔を向けることなく、ただ感情を抑えようとしたり。

「……卯杖、もうこれ以上俺に関わるな。いつか後悔する時が来るぞ。」

……………お互いにな」

最後に付け加えたように言った言葉は聞こえたのかどうかは分からない。

しかし、卯杖が俯けていた顔を上げ、こちらに視線を向けるのを感じた。

俺はそのことに気付きながらも無視して、止めていた足を再び動かす。

徐々に近づくお互いの距離に対して、その間に決して届かないものがあつた。

卯杖の隣、ちょっと手を伸ばせば、少し声を出せば、すぐに届くはずの場所。

その場所を通り過ぎる時、時間が僅かだけ引き延ばされたような気がした。

俺が進めていた歩調を乱すはずがないのに。

結局、俺も、卯杖も、何も言わず、何もしなかった。

ただその場所を俺は通り過ぎ、右の道、自分の家への帰り道へと進む。

卯杖はただ分かれ道の前に立ったまま動こうとせず、じっとしていた。

俺がそのことを気にかけることも、まして訊ねることもない。

……そうだ、これでいい。これでいいんだ。

消えた激情と頭の中に響く声を確認して、俺はそう思った。

そのまま、俺は一人、孤独となって家へ向かって闇の中を帰って行った。

> 卯杖 真由 Side <

あたしはただ、彼 俊の後ろ姿を見つめていた。  
その姿はゆっくりと離れていき、暗闇の中へと紛れていく。

「……………あたしでも、ダメなの……………」

あたしのそんな呟きは、誰に聞かれることもなくただ宙に消えていく。

俊の姿が完全に見えなくなるまで、あたしは動くことができなかつた。

一人となって、自らを包もうとする闇がより深くなったように感じた。

> 卯杖 真由 Side Out <

ようやく家に帰りついた時にはすでに夜としか言えないほど暗くなっていた。

もう自らの身体を確認することすら難しいレベルだ。

そんな時間でも自分の家に明かりがついていることはない。

俺はそのことを確認して、ただ無言でドアを開けた。

そこには誰もいない真つ暗な空間が広がっている。  
電気をつけながら、何も言うことなく、靴を脱いで家へと上がった。

その後は日常と同じで何を考えるわけでもなく、流れるように行動する。

いつものように自分で夜食を作り、いつものように一人で静かに食べる。

いつものように自分だけの家事を行い、いつものように風呂に入る。

何年間も続けてきた変わることのないそんな生活。

全ての作業を終え、俺はリビングのテーブルについて一息いれた。  
いつもの習慣なのか、ふとある物に視線を向ける。

テーブルの中央に置かれているのは、一つの写真立て。

そこでは、一人の男の子が一組の男女に挟まれて嬉しそうに笑っていた。

代えの存在しなないたった一枚の家族写真。

それに掛けられているのは、首飾りである一つの水晶<sup>クリスタル</sup>。

その輝きは預かった当時から衰えることなく、光を鮮やかに反射している。

最早二つしか存在しない、家族間の繋がりだった。

俺はそれらをじっと見つめてみると、少しばかり眠気を感じた。

今日はかなりいろいろあったので少し疲れたのかもしれない。

俺は軽く休憩しようとテーブルにうつ伏せてゆっくりと目を閉じた。

思いのほか、あっさりと眠気に従って意識が薄れていく。

俺は水晶<sup>クリスタル</sup>の優しき輝きを感じながら、意識を手放した。

だから、俺は気付かなかった。

その輝きがゆっくると増こつてくると

### 第3話 “それぞれの心情”（後書き）

すみやせんしたああああ！！！（土下座＋体育会系）

1週間休んでおきながら更新が遅れるとは……

違うんです！ 書かなかつたわけじゃないんです。

まず文章の長さ。付け加えていったらいつの間にかこんなに

そして、現実の忙しさ。次から次にやる事が降ってくる。

こっちもがんばって生きてるんだ。

休みをくれ！ そして書かせろ！！

そんなことを叫びたい今日この頃です。

さて、大変言いにくいことが一つ。

……今週も更新できないかもしれませんが……

はい、言いたいことは分かります。物を投げないでください。

理由は二つ。一つはもうあと五日ほどしかないということ。

もう一つはテスト期間に入るということです。

小説優先といきたいですが、多少は勉強しないといけないので。

一応次回はそこまで長くならないので大丈夫かもしれませんが。

……はい、信用できませんよね

ですので念のためそのように予告しておきます。

本当にすみやせんしたああああ！！！！

というわけで次回でもよろしくお願ひします。

#### 第4話 “夢と次元の狭間”（前書き）

この物語には多数のパロディで構成されています  
とあるストーリー、とあるセリフ、とある場面などにおいてよく知られているものが使われていることがあることをご了承の上でお読みください

#### 第4話 “夢と次元の狭間”

俺は閉じていた目をゆっくりと開いた。

そこに広がっていたのは一面の白。

最早雪でも表現できないだろうという純白。

そこには何も存在しない。

物体はおるか、地面や空、上下左右という方向すら。

ただそこにあるのは真っ白な、無の世界という空間。

そんな場所に俺はただ一人、ついてしまった黒点、世界の異物として存在している。

……ああ、これは夢か。

俺はそんな状況の中で特に驚くことも考えることもなくそう思った。

勘が鋭いと言われる（主に卯杖から）俺は夢だと気づくことが多い。

そんな夢を覚醒夢、または明晰夢と人は呼ぶ。

話によると、その状態では人はどんなことでも自由にできるらしい。

だが、俺はそのことを嘘だといつも思う。

何故なら、実際にそんなことができたことは一度だってないからだ。

空を飛んだことはないし、好きな状況に変えることができたこともない。

もし卯杖にこのことを話したら、『現実的すぎるのよ』と返ってくるだろう。

確かにそうかもしれないが、俺にだって夢ぐらいはある。

それはもう叶うことはないだろうが……

まあ、その辺りは今のところ蛇足だろう。

とりあえず、今の状況について考えることにする。

もう一度辺りを見渡して見るが、やはり何も存在しないのは変わらない。

そういえば、今俺は浮いているという状態なのだろうか？

地に立っていないどころか、そもそも地面が存在しない。

自分以外何も存在しないのだから、上下左右もまるで関係ない。

そうなる疑問に思うことが一つ生まれる。

『何故こんな夢を自分が見ているのか？』というものだ。

意識的であれ無意識的であれ、心の深層部分が大きく関わっているのが夢だ。

つまり、俺がこういった夢を見るのも何らかの理由があるはずなのだ。

しかし、思い返す限り俺がこんな夢を見る原因は一つたりともない。

そんな考えに耽っていると

突然、目の前の光景が歪み始めた。

いや、その表現は正しくないだろう。

何も存在しない場所を光景と呼んではいいとは思えない。

この場合は“空間”が正解といえる。

ッ！！

俺は突然の眼前の変化に驚き、咄嗟に後方へと飛び下がった。

そしてすぐに目の前だけでなく自分の周り全体で歪みが生じていることに気付いた。

僅かに腰を低く構え、どんなことが起ころうとうまく対応するよう<sup>に</sup>気を張る。

そんな俺に関係なく、周りの空間の歪みはどんどん大きくなる。

その状況に注視していた俺は、そこに何かが存在していることに<sup>気づく</sup>。

そう思ったと同時にまるでビデオが巻き戻されるかのように歪みが直っていく。

先ほどと比べてこちらの方が明らかにスピードは速い。

あっという間にその現象は収まった。

そして、俺はその場所に残ったものを見る。

即ち、俺の周りを囲むように現れた無数の扉を。

扉は全て同じ造り、同じ大きさで構成されていた。

全体的に木製であり、取っ手のところだけ金属の多少高級感のある扉。

そんな扉が特に法則性があるわけでもなく、俺の全方位、上下左右至る所に置かれていた。

その上、それらが見える範囲全てにおいて奥の方まで続いている。今この場から見えるだけでも千はくだらないだろう。

ある意味壮大な光景へと変化を遂げた空間に半ば呆然と眺めていると

「汝、何故この空間にいる？」

背後からそんな声が聞こえてきた。

僅かながら緊張を解いてしまっていた俺は慌てて振り返る。

しかし、そこにあつたのはまるで変わらない扉の数々。

「この空間に存在するものは扉以外なら私だけのはず」

再び背後から同じ声が聞こえてくる。

今度は先とは違い、完全に集中していた状態だったので前より早く動いた。

しかし、やはりそこにあるのは扉のみ。

「確かにこの空間に来る者はいる。だがそれは私が許可を与えた者のみ」

二度目となる背後からの声。

それに対し、今度は振り向かず、俺は目を閉じて意識を集中させる。

そうしたこと俺はあることに気付いた。

「この場所に来た以上、目的は一つしかないがどうやってこの空間に入ってきた？」

その時響いた四度目の声は前方から聞こえてきた。

しかし、俺がどれほど見てもそこに扉以外の存在は確認できない。すると、前方5mほどの空間が先ほどと同じように歪んだ。

俺はそこに扉とは違うものの存在を確認し、自然体の状態で見つめる。

「答えよ。侵入者」

そいつは低い声色でそう言いながら、扉と同じように現れた。

身長は俺より少し低いぐらいだから160cm後半ほどだろう。

体型もそんなに痩せているわけでも太っているわけでもない平凡なものだ。

それでもそいつは明らかに街並みに出ると目を引く格好をしていた。

メルヘンチックなブーツに紫色の服装。同系統の先の尖った帽子。なによりも目を引く原因となっているのは、顔につけている白と黒の入り混じった仮面。

半々に分かれているそれは、白いほうが悪く彩った口で笑っている表情を。

黒いほうが悪く彩った涙を流しながら悲しんでいる表情を描いていた。

はつきりと言ってしまつと、どこからどう見てもどこぞのサーカスの道化師ヒエロだった。

こいつは一体……？

俺はその姿を確認してそう疑問に思う。

ただ俺はそいつの格好や正体についてそのように思ったわけではない。

先ほどからずっとだが、そいつには気配がなかった。

どんな生物でもそのもの独特の気配というものがある。

それは基本的に誰でも持っているものであり、常に存在するものだ。

そのはずなのだが、声が聞こえてくる方向からその主の気配を感じ取ろうとしたのだができなかった。

そして、今こうして姿を現し、向かい合っている状態ですら俺はそれを感じ取れない。

こんな奇抜かつ目立つ格好をしているのにも関わらずだ。

一応、中には元から気配が薄いものや訓練によって気配を消すことができるものもないことはない。

しかし、どちらにしても普通の生活をしているものには身につかないものだ。

もし、このまま人混みの中に入ったとしても誰にも気づかれないのではないか？

そう思うほど、こいつの気配のなさは異常だった。

そんな相手を前に俺は警戒を解かないまま、自然体で構えて出方を窺う。

対して、その問題のピエロはそんな俺をジッと見つめていた。

「……………うん？　汝は……………なるほど、そういうことが」

小さくそんな言葉を言ったかと思うと、一人納得したのか頷くピエロ。

今まで気にしなかったが、その声は仮面を被っているからか、くもっており、かなり聞き取りづらい。

俺はそんな様子のピエロを見ながら、半ば怪訝な気持ちになる。

すると、ピエロは多少緊張を解いて話しかけてきた。

「そう構える必要はない。こちらにお前を傷つけようとする意思はない」

そう言われても、こんな不自然すぎるやつの言葉を信じることはできない。

とてもではないが安心感を持てるわけもなく、ただやつの動きに注意する。

そんな俺の様子を見て、ピエロは苦笑した。

「ふふ、まあいい。そのぐらい用心深いほうが好都合だ。

得体の知れないものを信じることはできまい。

とりあえず、自己紹介といこうか。私の名はジョーカー。

この空間にある次元の扉の管理と守護を任されているものだ」

そう言いながらゆっくりと一礼するジョーカー。

ピエロの格好をしたやつから礼をされると微妙にバカにされている気がするの俺だけだろうか。

まあ、その礼には意外と礼儀正しさを感じて怒りなどや湧いてこなかったが。

それよりも、もっと言いたいのは

「……………明らかに」

「確かに本名ではないが、偽名というわけではない。この場所での通称のようなものだ。

悪いがそう名乗るのが私のルールなのだよ。“大神 俊”」

俺の言葉を遮り、自分の名前が呼ばれたことで口を閉じる。

ただ驚きを表情に出さないように無表情を貫こうとするが、失敗

しているだろう。

分かっているからこそ、俺は鋭くジョーカーを睨みつけた。

何故　　？

疑問の言葉が俺の頭の中に響き、思考を深めていく。

そんな俺の様子を見て、ジョーカーはクツクツと静かに笑った。

「やはりこの瞬間が一番楽しいな。咄嗟の反応というものは誰しも同じだ。

過去何度同じセリフを口にしたことが。何度同じ反応をした者がいたことが。

今、新たに私と汝によって再びそのことが繰り返される。

そして、これから先の未来でも私は同じことを繰り返すだろう」

大きく手を広げながら、大仰にそんなことを口にするジョーカー。俺が何も言わずにそれを見ていると、ジョーカーはそこで一度話を切った。

そして、困ったように首を振る。

「やれやれ、ふざけるのもこのぐらいにしようか。このままでは話が進まない」

全てお前が勝手にやっていることだろうと言いたいののはきつと俺だけじゃないはずだ。

すると、ジョーカーは再び苦笑の声を洩らした。

「手厳しいな。確かに今まで多くの者がそう思っていたよ」

その言葉に俺の中である一つの仮説が生まれる。

その考えを肯定する言葉を投げかけられる。

「さすがに気づいたか？ では一つずつ汝の疑問に答えてやろう。まず、『何故、汝の名を知っているか？』」

それは汝が思っている通り、汝の心が読めるからだ」

やはりそうか……………。

ということは、こいつは“テレパシスト精神感應能力者”なのだろうか……………？

自身の予想通りの回答に俺は驚愕しながらもさらに考えを深めていく。

そんな俺の考えも読んだのだろう、ジョーカーは続ける。

「残念だが汝の言うところのサイキック超能力とは別物だ。

それにこの力は私のものとはいえこの場所ではしか使えるものではない。

そもそも今、この場所に我々の肉体は存在しない。

今の私たちは幽体離脱を起こしている思念体のようなものだ。

だから人の思考が読みやすいし、私に気配が存在しない。これが

『私に気配が存在しない理由』だ」

「なるほどな」

俺は口に出してそう答えた。本当のことのようだし、ならば黙っていても意味はない。

すると、あからさまに嬉しそうにジョーカーはからかいの声を向けた。

「おやおや、黙っているのを止めたということは少しは信用してくれたと取っていいのかな？」

「ぬかせ。無駄なことはいらない主義なんぞな。とつとと質問させて

もらっ」

「別に構わないが、こちらにも黙秘権や嘘をつくぐらいは認めてもらおうか？」

「そもそも、“ここはどこだ？”」

ジョーカーの言葉を軽くスル。しながら次の疑問を質問する。

ジョーカーは溜息をつくような仕草を見せながら首を振った。

「まったく、これだから最近の若者は礼儀が鳴っていないから困る。まあいいだろう。しかし、質問の意味が分からないのだが？　この場所のことは説明したはずだ」

「ああ、“精神だけの空間”とお前は言った。

それは理解できる。何故ならここは“俺の夢”のはずだからな。

だからこそ、何故お前がここにいるのか分からない。

それでももう一度質問だ。“ここはどこだ？　もしくは何故お前がここにいる？”」

「なるほど、言いたいことは分かった。

が、それを言いたいのはむしろこちらの方だ。

確かに探していたのはこちらだが、何故汝がこの空間にいるのだ？　この空間に来るのはとある例外を除いて、私が招くしか方法は無い。

手間が省けたと言えばそうだが、そちらから出向くとは思ってなかった」

「なんだと？　どういうことだ？」

ジョーカーの言葉に俺は驚いた。

俺を探していた……………？

ジョーカーはそんな俺の様子を見ながらも、構わず話を続けてき

た。

「なるほど、汝も知らぬことか。ならば別に構わない。さて、『この空間がどこなのか？』だったな。

どうやら今この空間は二つの意識が混じり合い、本来別々のものが一つに繋がっているようだ。

一つは汝の夢という空間。もう一つは私の次元の狭間という空間。つまり、ここは汝の夢の中であってそうでない。私の空間の中であつてそうでない。

そうだな、言うならば“夢と次元の狭間”とでも呼ぼうか？

だからこそ、今この場に私がいてもおかしくないし、逆に汝がいともおかしくはない」

俺の疑問に対して、なんとも分かりやすいのか分かりにくいのか判断のつきづらいつらい説明が返ってくる。

とりあえず、その言葉通りに受けとることにしても疑問は増えていくばかり。

加えて、やつが嘘をついている可能性も少なからずある。まあどちらにしろ、会話を続けられないことには分からない。

そして、今までの言葉で見逃せないものもあった。

「ちよつと待て。お前は何を言っている？

“次元の狭間”とは何だ？ お前はここでその扉を管理していると言ったが関係あるのか？

そして、“俺を探していた”だと？ なんてそんなことをする？ 俺に何の用だ？」

ジョーカーが答えを返す前に、続けざまに問いを投げかけていく。たたみかけるように、問い詰めるように言葉を続ける。

ジョーカーはそんな俺をただ何も言わず、見つめていた。



どうしてこんなにも話が通じず、何も知らないのかと思えば、あ奴が話していないのか。

まったく奴め、これは何の冗談だ？

まさかここまで運命とは素晴らしく無駄がなく、そして残酷なものだったのか。

私も大概もことは理解しているつもりだったが、まさかまだ知ることがあるとは。

ここまでくれば最早滑稽としか言いようがないな。

ありがとう、大神俊。私は今すごく感動し、楽しみ、悲しんでいる。

礼と言っては何だが、あることを教えてやろう」

そこまで言って一旦話を切ったかと思うと僅かな間を空けてあることを告げた。

「 汝のことは“心を読んで知った”と言ったが、本当は“それだけが理由ではない”」

ジョーカーの突然の変異に呆然としていた俺はその言葉で我に返る。

「 なんだと、どういう

」

『ことだ？』と言おうとした時、俺はあることに気づいて言葉を止めた。

ジョーカーの身体が透けて行っていることに。

ジョーカーだけではない。俺たちを囲むかのように存在する無数の扉も同じ現象が起こっている。

それらはまるでこの空間の色である白に溶け込むかのように、光に覆われるかのように、世界から異物である存在を消されているか

のように見えなくなっていく。

それはどんどん進行し、加速度的にスピードを上昇していく。

俺が言葉を切った時、向こうも俺の様子で気づいたようで言葉をかけてきた。

「やれやれ、もう時間か？ 流石にそんなに長くは持たなかったよ  
うだな？」

何故だか繋がっていた空間が元に戻るようだ。

もともとこんなことは異常だから、しばらくすれば世界の修正力が働くのは当然だがな。

ではそろそろお別れだ、大神俊。私がお前のことが見えなくなっているようにお前も私のことが見えなくなっているだろうが、礼をする程度の礼儀はあるのでね」

「待て、まだ訊きたいことが　っ!？」

あっさりとした口調でそんな説明をした後に、すでに視認するところが困難になってきたほど身体を覆ませた状態で一礼しながら別れを告げるジョーカー。

いや、向こうからすれば消えて行っているのは俺の方らしいが。  
なんとか引き留めようとする俺が声を張り上げようとした時、閃光が生まれた。

それは僅かに存在していた姿を一気に白へと帰していく。

咄嗟に閉じてしまった目の中ですら、白い空間が広がって見える。  
そんな状態で俺の意識がなくなり、そして浮上していくのを感じる。

…夢が……………終わる……………の、か……………

目覚めへと向かってゆっくりと意識を失っていく中、一つの声が響き渡った。

「一つだけヒントをやるう。これからお前にはある試練が訪れるだ

ろつ。

それに逃げずに立ち向かえ。そうすればこの話の続きをしてやる  
う。

まあ、その時が来たらまた会おう。ただし、生きていければの話だ  
がな」

最後に先ほどのような笑い声を残すジョーカー。

その言葉はなぜか意識がなくなるうとしていいるはずなのにしっか  
りと聞こえてきた。

そして、それを最後に俺は自らの意識を手放した。

ジョーカー Side

「……………さて、困ったことになったな」

私は一人だけとなった空間の中でそう呟いた。

そして、ゆっくりと空間の中を移動して行くと、やがて一つの扉  
の前に立った。

その扉は私が鍵を使うまでもなく、既に僅かにはあるが開いて  
いた。

私はそのことを確認して、溜息をつきながらもただ見るだけだ。

扉を閉めることもしない。いや“できない”といった表現が正し  
いだろう。

私は扉の管理者であるが、“今回のこと”でそこまでの権限は与  
えられていない。

「だが、今までこのようなことがなかったが……さてどうするか……?」

私は誰もいない空間の中でそう独り言を続けていく。

見つめている扉から、少しだけだが向こう側の空間が覗いていた。

「念のため、多少フォローにまわった方がいいかもしれないな」

その程度のことなら、私にも権限があるはずだ。

あまり過度の一人に対する助力はルール違反だが、少し助言するぐらいは認められている。

そのことを確認して、これからの行動を考える。

そんな思考の中にさっきまで存在していたあの青年のことが思い浮かんだ。

自然と私は苦笑を洩らした。

「やれやれ、それにしても“大神”とは。これが神の采配というもののなのか。

お前なら運命と答えるのだろうか。そうだろう、“大神龍”」

私は天を、というより宙を仰いだ後にここにはいない者の名を呟き、その扉に背を向けた。

そのまま元来たようにゆっくりとその場を離れていく。

扉はあつという間に無数の他の扉に隠れて消えて行った。

それでも、望めばあの扉はすぐに現れてくれるだろう。

深淵のように深い闇が広がるあの扉

その先に広がる世界とは

神々のゲームのフィールド

こうして、私は次の行動に移るべく準備を始めた。

ジョーカー Side out

#### 第4話 “夢と次元の狭間”（後書き）

……はい、ごめんなさい。

また遅れました。

しかし、今回は言い訳はしません、というよりできません。

理由は単純に自分の怠惰が原因だからです。

はい、ダメ作者です。

ひよっとすると2週間おきのほうがいいのかもかもしれません…

それでも読んでくれるという読者の皆様のためがんばります。

みなさまも生温かい目で見守ってけると幸いです。

ではまた次回で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0643/>

---

仮想現実の扉

2010年10月14日17時00分発行